令和５・６・７年度豊橋市教育委員会研究委嘱
研究分野「学習指導」

令和６年度豊橋市立豊城中学校研究概要（２年次）

１　研究主題

自らを客観視し、最適な学びを自己決定できる生徒の育成
～世界（ひと・もの・こと）との関わり合いによる考えの再構築の繰り返しを通して～

２　主題設定の理由

急激に変化する時代の中で、社会の在り方そのものが、これまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わりつつある。「私たちはどう行動するべきか」という問いに、確信をもった答えを誰も見いだせない。これからの時代を生きる子どもたちは、予期せぬ事態に対しても、必要だと考えられる情報を、多くの情報の中から選択し、歩んでいく必要がある。

本校では、「自律と協調の精神を養い、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成」～知性・品性・感性あふるる豊城中～という教育目標のもと、「自ら考え行動できる生徒」、「思いやりのある生徒」、「ねばり強い生徒」を目ざし、教育活動を行っている。生徒たちは仲間意識が高く、多様性を認め合える素地がある。一方で、自分の考えに自信がなく、多数意見に流されてしまうことも多い。他者のことを認めるよさを更に伸ばしながら、自律の力を高めていきたい。自らを振り返ることで自己理解を深め、今自分自身には何が必要で、何をすべきなのかを判断して行動できる力を育みたい。

社会情勢と生徒の実態を踏まえ、「自らを客観視し、最適な学びを自己決定できる生徒の育成」を目ざす。そのために、自分の学びを振り返ることと、世界（ひと・もの・こと）と関わる協働的な学びを繰り返す。そうして自分になかった考えを知ったり、改めて自分の考えを見つめ直したりすることで、自分を客観視し、最適な学びを自己決定し、実行しようとすることができるだろう。

３　目ざす生徒像

「自らを客観視し、最適な学びを自己決定できる生徒」

「最適な学び」とは、

・　自らを客観視し、目標を達成するために必要なことを考えた学び

「自己決定できる生徒」とは

・　最適な学びを考え、実行しようとすることができる生徒

▼教科としての目ざす姿を設定する

例：理科として「自らを客観視し、最適な学びを自己決定できる生徒」とは、

問題を解決するために個人追究を行う中で、仲間や教師との対話の中で他者の考えを咀嚼し、自分の仮説や追究方法を見つめ直し、学びを更新していこうとする姿

４　研究の仮説

①生徒自身が成長を感じられる授業展開の中で、②自分の学びを振り返り理解することと、③世界（ひと・もの・こと）と関わる協働的な学びを繰り返せば、自らを客観視し、最適な学びを自己決定することができるだろう。

5　研究構想図

6　研究のてだて

⑴　生徒自身が成長を感じられる授業展開をするために　①

〇生徒が単元を通して成長を実感できる授業づくり

・「であう」→「みつめる・かかわりあう」→「まとめる・ひろげる・活用する」ことができる学習を展開できる単元を構想する。（成長単元）

・授業内における生徒が成長を実感できる効果的な支援を講じる。（個別最適な学びのてだて）

※　英語科、数学科の少人数指導を含む

〇魅力ある教材づくり

・子どもが、問題意識をもったり、粘り強く授業に取り組んだりしたくなるような魅力ある教材づくりを行う。

⑵　自分の学びを振り返り理解するために　②

〇生徒が自分自身を客観的に捉えるための振り返り

・生徒が「であう」→「みつめる・かかわりあう」→「まとめる・ひろげる・活用する」単元を通して、学びを客観的に振り返り、よさや足りなさに気づく振り返りを実施する。

〇メタ認知力、非認知能力向上につながる振り返りや支援

⑶　他者と関わる協働的な学びをするために　③

〇生徒が他者と関わり合うためのコミュニケーションスキル向上

・生徒が他者との対話スキルを高め、自己理解につなげるコミュニケーションスキルタイム（コミケ）を実施する。

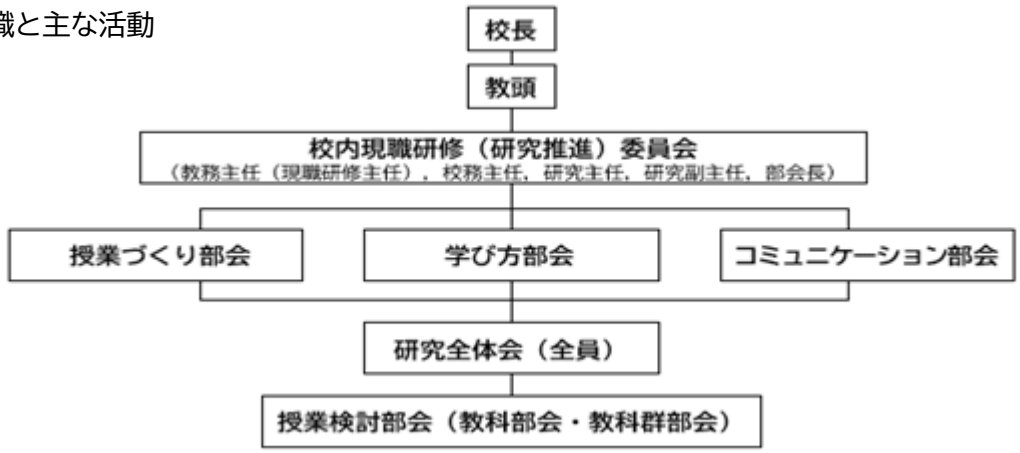
・コミュニケーションスキルタイムや授業の中で「伝えたい・わかってほしい」（他者意識）と、「聴きたい・わかってあげたい」（わかろうとする心）の向上を図る。

〇他者と関わる協働的な授業展開

・単元構想の中に、他者と関わる協働的な学びを組み込む。

7　研究の組織と主な活動

(1)　研究組織



(2)　部会

部　会		
授業づくり部会	生徒が単元を通して成長を実感できる授業・単元構想づくり、授業案形式作成、授業内てだての検討、教える授業から学ぶ授業への教師意識改革	リーフレット
学び方部会	振り返り、朱書きや対話のあり方	リーフレット
コミュニケーション部会	コミュニケーションタイム、授業での対話力向上	リーフレット

(3)教科群部会

教 科 群	1　群	2　群	3　群	4　群
◎群リーダー 〇教科主任	国語 〇一柳（3） ***◎吉川（2）*** 芝原（1）	数学 夏目（3） 〇秋山（2） 三浦（1）	社会 〇小野田（3） ***鈴木（3）*** ***◎磯部（1）***	理科 〇清川（3） ***◎花井（2）***
	英語 尾﨑（3） 森（2） 野尻（1） 〇早川（1）	特別支援 ***◎〇加藤（5組）*** 川後（6組） 伊藤ゆ（7組）	保健体育 山本（2） 〇伊藤祐（1） 児山（養護）	音楽 〇河合直（2）
場　所	調理室（特支西の部屋）	被服室（3F 少人数）	保健室	2F 多目的室
	技術：芳賀、家庭：上林、美術：鯨（川後）			

※　下線は11.1授業予定者、波線は1学期実践予定者、網掛けは全体研（要請訪問対象）

※　1学期実践・11.1授業実践を行わない教諭は、学校訪問と同じ単元を自主公開する。

※　***斜体の研究推進委員***は、司会を行う。原則、記録係は設けないため、各群で工夫する。

※　***研究推進委員◎***は、群のリーダーを務め、群内の動きに関する調整・連絡を行う。

8　令和６年度の研究計画

(1)　年間計画

1学期　研究方針、代表者授業、全体研究授業、7/19 非認知能力学習会

2学期　学校訪問、ブロック現研（中間発表）、研究先進校視察

3学期　総論・てだて検証、次年度の計画、研究先進校視察

月	活動内容
４月	◇今年度の研究活動計画の検討と決定 ◇専門部会方針、計画、てだてと検証方法の検討と決定 ◇授業案の形式 ◇教科で目ざす姿（教科・群）
５月	◇ブロック現研・日程検討、リーフレット、研究構想図提案 ◇モデル授業研（花井） ◇第１回研究委嘱校連絡会（５/10）
６月	◇全体授業研（野屍） ◇自主研授業（鈴木）
７月	◇Ｒ６第１回研究に関わる生徒の実態調査 ◇Ｒ６第１回研究に関わる教師を対象とした授業の実態調査 ◇7/19現研：非認知能力学習会（仮）　岡山大学 教育推進機構 准教授 中山　芳一氏
８月	◇ブロック現研（学校訪問）本時案検討 ◇8/19,20 ブロック現研の助言者・司会者への研究概要説明会、 授業者との顔合わせ会、単元相談
９月	◇ブロック現研・学校訪問授業案検討 ◇ブロック現研授業案　助言者と相談（各授業者）
１０月	◇研究校視察（新川小、鷹丘小、北部中） **◇学校訪問10/28**
１１月	**◇12ブロック合同現研 兼 中間発表会11/1** ◇ブロック現研のまとめ、振り返り ◇Ｒ６第２回研究に関わる生徒の実態調査 ◇Ｒ６第２回研究に関わる教師を対象とした授業の実態調査
１２月	◇ブロック現研のまとめ、検証 ◇Ｒ６第２回研究に関わる生徒の実態調査 ◇Ｒ６第２回研究に関わる教師を対象とした授業の実態調査
１月	◇研究２年次の総括 ◇本年度の成果と次年度に向けて（専門部会） 専門部会（本年度の研究の成果について）
２月	◇研究２年次の総括 ◇本年度の研究の成果と次年度に向けて（推進・専門部会）
３月	◇次年度に向けて

⑵　１２ブロック現職研修会　令和６年１１月１日（金）

・２学期に全クラスがブロック現研で中間発表を実施（１学期に全体研を行った１年１組野屍教諭を除く）

〈中間発表会の当日の流れ〉

13:10　13:20　13:40　13:55　14:10　14:20　15:10　15:20　16:30

受付	全体会（体育館）	移動	コミュニケーションスキルタイム公開（各教室）	移動	公開授業（各教室）	生徒下校	協議会（各教室）

学年学級	授業者	教　科	助言者（敬称略）		
１年２組	早川　愛里	英　語	五並中学校	校長	鈴木　宏卓
１年３組	三浦　光景	数　学	羽根井小学校	校長	中村三木也
１年４組	磯部　真輝	社　会	野依小学校	校長	伊丹　浩之
２年１組	山本　毬代	保健体育	岩田小学校	校長	小野田朋恵
２年２組	河合　直子	音　楽	二川南小学校	校長	岩竹　伸治
２年３組	森　　安稔	英　語	磯辺小学校	校長	稲田　恒久
３年１組	一柳　志織	国　語	愛知大学	教育課程センター事業主任	河野　宏雄
３年２組	清川　康輔	理　科	八町小学校	校長	山本　武志
３年３組	夏目　貴啓	数　学	南陽中学校	校長	近藤　英治
５・６・７組	川後　晶裕	特別支援	吉田方小学校	校長	松岡　史憲

９　令和５年度　１年次の研究の振り返り

(I)　授業づくり部会

①　生徒自身が成長を感じられる授業展開が伝わる授業案形式作成（成長単元の授業案形式）

生徒自身が成長を感じられる授業展開の実践になるために、また読み手に伝わりやすい授業案にするために授業案の形式を検討した。

【実践のまとめ】

◇社会科　単元名　赤字の豊橋には魅力がない？！～ふるさと納税に関する学びを通して～

	教師のてだて・生徒の姿
であう	単元の導入で、教師が夏休みに石川県に訪れた際の写真を紹介した。長期休業明けの生徒たちは自分の夏休みの生活と重ね合わせ、興味をもって写真を見ていた。その中で、ふるさと納税の自動販売機を紹介したところ、「返礼品って何？」、「何の自販機？」とテーマに対する関心をもった。そこで、豊橋市の財政課・豊橋観光コンベンション協会からゲストティーチャーを招きふるさと納税講座を行うことで、寄付と返礼品の仕組みや各自治体の寄付受入実績などの基本的な知識を理解した。講義のなかで、豊橋市のふるさと納税に関する赤字が７億円であることを知った生徒は、「豊橋市の７億円の赤字はこのままでいいのか」、「私たちで PR することで赤字を解消することができないか」という問題意識をもち、追究を始めた。
かかわりあう	追究では、タブレットを使い調べ学習を行った。ちくわやうなぎなどの豊橋の名産として有名な商品以外にも、あいち鴨を唯一扱っている農場があったり、胡蝶蘭の出荷が全国１位であったりするなど、豊橋市には自分たちが知らない魅力がたくさんあることを知った。水陸両用車（ﾌｧｲﾔｰﾀｰﾄﾙ）や、日本最長のはしご車（ﾚｯﾄﾞｼﾞﾗﾌ）など、全国的に珍しい設備を活用し、体験型の返礼品というものがあることも理解した。その後、豊橋市の返礼品と他自治体の返礼品を比較する話し合いでは、いくらやホタテなどの海産物、有名なブランド牛などは豊橋市にはないものの、それ以外の豊橋市ならではのよさを再認識することができた。その後、具体的に豊橋市の返礼品としてどんなモノ・コトが提案できるかを個人追究した。ブラックサンダーや豊橋筆、ちくわなど商品型の返礼品を売り出す方法や写真の見せ方にこだわって追究する生徒や、祇園祭や鬼祭り、ドラマのエキストラや市電などを活用する体験型の返礼品がよいのではないかと考える生徒など、それぞれが自分の考えをもって話し合った。振り返りには「今のふるさと納税の実績から考えて、豊橋市の魅力ある商品を返礼品とするべきだ」、「豊橋市でしかできない体験をしてもらうことで、豊橋市のことを好きになってもらいたい」と記述するなど、具体的に返礼品としてどのようなモノ・コトがよいのかを深く考えることができた。
まとめる・ひろげる	豊橋市の赤字解消に向けて具体的にアイデアを考えた生徒に対し、実際に市の担当者にプレゼンする機会を設けた。アイデアを具現化する方法を客観的に考えたり、効率よく発表資料を制作したりするために、グループでの活動を推奨した。それぞれのグループでは、一人一人がこれまで追究してきたことをもとに考えを深化させ、思いのこもった発表資料を制作した。 あるグループでは「モノ×コト　豊橋で思い出づくり」と題して、家族向けに旅行できる返礼品を提案した。その他にも「八雲団子活用計画」、「ポケふた（ポケモンのマンホール）の活用」など、商品型・体験型という枠組みにとらわれず豊橋市のよさを他自治体にしってもらいたいという思いのこもった発表が続いた。プレゼンを受け、市の担当者からは、「これだけ中学生の皆さんが豊橋市のことを真剣に考えてくれていることをとても嬉しく感じる」、「皆さんの学びと活動に私自身も刺激を受けました」など、学びの成果を客観的に評価してもらった。生徒のふり返りには、「豊橋市を愛する気持ちが大切だと思った」という記述がみられるなど、学びが形になった喜びとともに、郷土に対する愛着が高まっている様子が感じられた。

【成果と課題】〇…成果、▲…課題

〇市の担当者から説明を受け、最終的に市の担当者に提案をするという、単元を通した問題意識が生徒の中に発生していたため、単元を通して意欲的に学ぶことができた。

〇個人追究と協働学習（話し合い・グループでのプレゼン）を取り入れることで、必要に応じてグループをつくることができ、個別最適な学びの機会を提供することができた。

〇単元のまとめとして市職員や地域の方にプレゼンをすることで、自分たちの学びが社会とつながっていることを実感することができた。

〇豊橋市のことを調べたり、豊橋市の魅力をＰＲしたりする方法を考えることで、豊橋市に対する愛着を高めることができた。

▲一人一人が自分の考えをしっかりともっていたが、話し合いでは発言せずに終わってしまった生徒がいた。より多くの生徒が自分の考えを関わらせることができるようにしたい。

▲提案したあとに実際に返礼品が変化するなど、学びの成果をより実感することができたら、さらにこれからの問題解決的な学習に対する向き合い方を高めることができただろう。

【実践まとめ】

◇数学科　単元名　データ王は誰だ！？ マイカーチキンレース調査　～６００mmの崖

	教師のてだて・生徒の姿
であう	単元の導入で、教師は、マイカーチキンレースを学級対抗で開催することを生徒に伝えた。レースの方法と自分たちでオリジナルマイカーを作って勝負することを知ると、生徒は「消しピン遊びに似ている」、「楽しそう、やってみたい」と声を上げ、活動への関心をもった。大会にはクラス代表のマイカーが選出されることを知り、仲間を納得させられるマイカーをつくるためには、データに基づいた説明が必要であるという思いを高めた。そして、生徒は、データを活用し、どうすれば最高のマイカーを作れるだろうという問題意識をもち、追究を始めた。
かかわりあう	追究では、自作のマイカーを使い、進んだ距離のデータを収集する活動を行った。データ分析は、教師自作の Excel ファイルを用いた。１回目はデータの取り方とそのデータを活用して説明する方法を学ぶために、教師が意図的にグループを決めて実践した。生徒は、グループごとに興味があるデータをひとつだけ変化させ、進む距離を調べた。初めて使う Excel 機能の便利さに驚き、仲間と協力してデータを集めた。データを見やすく一覧にし、今まで学習した情報（最大値、平均値、ヒストグラムなど）を比較した。説得力のある説明の仕方を仲間と相談しながら考えをまとめた。２回目以降は、個人でオリジナルマイカーをつくり、データ収集を行った。手際よくデータを取ったり、自分のいろいろなデータを見比べたりし、説得力のあるデータを見いだした。かかわり合いの場では、オリジナルマイカーを示しながら、データの確からしさを仲間に伝え合った。 仲間とデータをもとに議論する生徒
まとめる・ひろげる	まとめる段階では、クラス代表のマイカーを決める話し合いを行った。生徒は、自分のデータと仲間のデータと比較し、どのマイカーがクラス代表として相応しいかを議論した。データに基づき、相対度数が小さいものがよいと生徒が発言した。一方で、最頻値がもっとも適切なものがよいと述べた生徒もいた。自分たちがもとめたデータをもとに、相対度数や、ヒストグラムなどのデータのそれぞれのよさを比較し、根拠をもってクラス代表のマイカーを選んだ。 ひろげる段階では、クラス対抗の大会を開催した。各クラスで、より確からしいデータを根拠に選ばれたマイカーを走らせた。カーレースの結果に、データの確からしさを裏付けた生徒もいた。 生徒は、単元のまとめで「数値があると説得力のある説明ができることがわかった」、「ＡとＢを比べるときはデータを使うことが大事だとわかった」と振り返り、データをまとめる必要性を実感していた。 クラス代表のマイカーで結果を競う

【成果と課題】〇…成果、▲…課題

〇身近な遊びをもとにした教具を用いたことで、単元を通して意欲を継続させ取り組むことができた。

〇データを集める活動や説明する活動など、かかわり合いの場を取り入れたことで、自然と仲間と相談したり、協力したりする生徒が増えた。

〇Excel ファイルを活用することで、効率よくデータ収集ができ、追究学習の時間を多く確保できた。

▲Excel ファイルや生徒が集めたデータの一覧は教師が作成した。データ処理やデータを比較する一覧なども生徒が自作できるとよい。

▲データにもとづいて代表を出して大会を開催したが、データ以外の要因（摩擦力や力加減）も関係したため、データに関係する以外の部分をそろえられる教材を考える必要がある。

⑵　学び方部会

学び方部会では、メタ認知能力、非認知能力を高めるため、学習ログや視点を与えた振り返りの実践を行った。

①　学習ログ

長期休みやテスト週間に、必要な学習を見える化するため、学習ログを作成し、実施した。

【成果と課題】○…成果、▲…課題

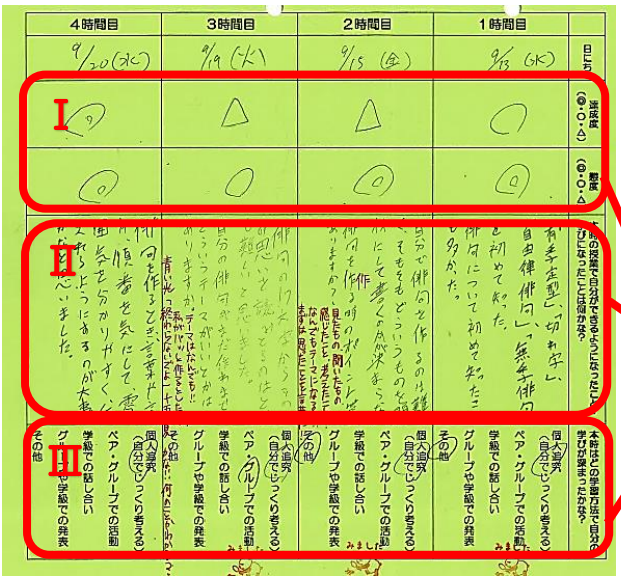
○すべきことが見える化され、意欲的に取り組む生徒もいた。

○テスト前には、「学習ログはまだですか」という生徒もいた。何を勉強すべきかの見える化が、生徒の必要な学びの把握につながった。

▲学習ログは全員に対して配付し回収した。学習低位の生徒には、学習ログがあれば、学習把握の一助となるが、学習ログがなくても、自分自身の必要な学びが把握できる生徒にとっては、計画を立てることがひと手間となってしまった。それぞれにあった支援を検討していく必要がある。

▲テスト週間や長期休暇のみの実施にとどまった。日々の家庭学習にもつながるよう再考していきたい。

②振り返りシートの活用



国語の実践Ⅰ（R5.10 月）

３年生国語科授業実践において、メタ認知向上を目標にした振り返りを実施した。

【国語科３年単元：俳句の可能性・俳句を味わう】

【国語科３年単元：俳句の可能性・俳句を味わう】

Ⅰ　本時の目標に対する達成度を自己評価する。

Ⅱ　本時の授業で自分ができるようになったことを記入する。

Ⅲ　学びが深まった学習方法を記入する。

【成果と課題】○…成果、▲…課題

○授業開始時に目標を示すことで、授業後の振り返りの視点をもつことができた。

▲自己評価が、成績につながることを意識する気持ちが強く、◎が多い傾向がある。

▲振り返りや自己評価と、教科としての評価が混在してしまう。

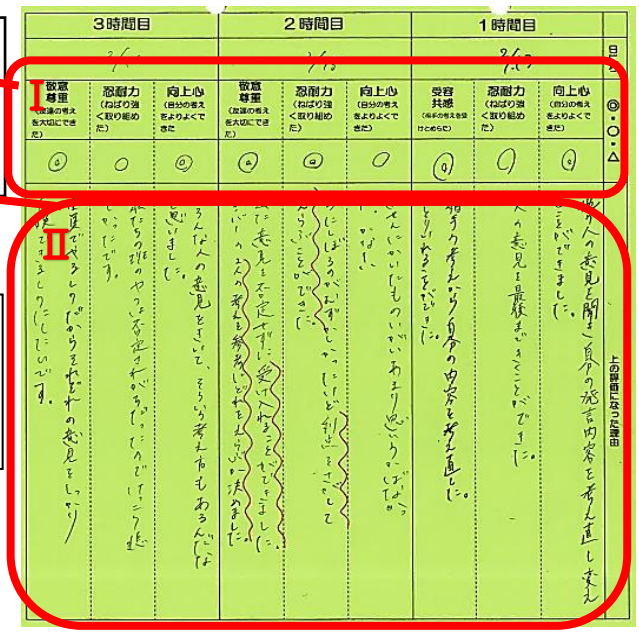
国語の実践Ⅱ（R6.２月）

10 月実践を受けて、振り返りを改善して、２月に実践を行った。

【国語科３年単元：合意形成に向けて話し合おう】

Ⅰ　非認知項目（教師が提示した３つ）の達成度を自己評価する。

Ⅱ　Ⅰの評価理由を記入する。



・振り返りの中に、非認知項目を入れる。項目は下記の中より選択する。

・自制心	・忍耐力	・俯瞰力
・向上心	・自尊心	・楽観性
・敬意、尊重	・受容、共感	・相互理解

「スウェーデンと日本発！非認知能力を伸ばす」（中山芳一、田中麻衣、徳留宏紀 著）

【成果と課題】○…成果、▲…課題

○国語の教科としての評価ではなく、自分を客観的に捉えられている。

○自分を振り変えるという点では、観点が明確なため、非認知能力向上の一助となったと考えられる。

▲実践が少なく、分析が不十分なため、各教科で実践を行い、検証を行う必要がある。

▲自分の学びの振り返り（自分の成長を実感すること）と、学習のまとめ（教科としての評価）の違いを明確化する必要がある。

③振り返りへの朱書き、言葉かけ（対話）の実施

朱書きや言葉かけ（対話）には、「教科として伸ばす」ことができるコメントと、「自分を知る」ことができるコメントに分けられると考える。

【教科として伸ばす】（例）

生徒：俳句を作る際に○○と□□という言葉で迷ってしまい、なかなか俳句が完成しませんでした。

教師：○○と□□、それぞれの言葉の意味を調べてみるといいね。どのような違いがあるかな？
また、それらの言葉は読み手にどのような印象を与えそうかな？

【自分を知る】（例）

生徒：今日の全体で意見を言う場で、なかなか自分の意見を言えませんでした。でも、友達の意見を聞いて、そういう考えもあるんだなと思って納得できました。

教師：「そういう考え方もできる」と思えたのは、自分の考えがしっかりもてているということだと思います。これからの授業で、グループ、全体での話し合いをする場面があります。話し合いで自分の思いや考えを伝えるにはどうしたらいいかな？

▲教科として伸ばすことと、自分を知ることを区別し、「どのような～？」「どうしたら～？」のような、**生徒に考えさせる**ような朱書きや言葉かけ（対話）を心がけていく。

⑶　コミュニケーション部会

研究の仮説にある「他者と関わる協働的な学び」の質を高めるために、対話力と発信力の向上をねらい、毎週水曜日の帯の時間に「コミュニケーショントレーニングタイム」を設定して取り組んだ。

①１・２学期の実践

１・２学期は、「話を聞く・質問する・伝える」を中心とした対話力向上を目的とする活動を行った。

右の【資料】にあるように「聞く⇒質問する⇒話す」の順にねらいを設定して活動を展開した。楽しく参加できるよう、個人またはグループごとに得点を競わせるなど工夫した活動を取り入れた。

分野	内容
聞く	話を上手に聞く
聞く	キーワードを正しく聞き取る
聞く	メモをとって情報を正しく聞き取る
質問する	相手が考えているものを当てるために上手に質問する
質問する	１つのことを深掘りして質問する
話す	短文をつくって簡潔に話す
話す	ある言葉について短く簡潔に説明する…※
話す	ナンバリングを使って端的に話す

【資料】対話力向上トレーニングの主な内容

実践例

右上の表の※印「ある言葉について短く簡潔に説明する」活動の例

① ３人または４人班を作り、班の中で順番を決める。
② １番目の人は、タブレット内のデータを見てお題を確認する。
③ スタートの合図で班のメンバーに別の言葉を使って説明する。（その言葉は使わない、ジェスチャーもなし）
④ ほかのメンバーは説明を聞いてその言葉を当てる。正解したら１ポイント。
⑤ ２番目以降の人も同様に説明し、ほかのメンバーが当てる。

【１・２学期の成果と課題】〇…成果、▲…課題

ある言葉について短く簡潔に説明する活動

〇「わかっていても人に教えることができなかったが、１つずつ情報を整理して話すと発表しやすい」「ナンバリングを活用して、みんなにわかりやすいプレゼンやスピーチの方法を考えたい」という振り返りから、話し方の型を学んで練習することで、考えを伝えるこつをつかむことができたことがわかる。（ナンバリングを使って端的に話す活動）

〇「大事なワードとそうでないワードを聞き分けることができるようになった。授業でも何が大事でそうでないか聞き分けてノートに書くようにしたい」という振り返りから、メモをとりながら大切な情報を聞き取る力をつけ、授業に生かそうとしていることがわかる。（メモをとって情報を正しく聞き取る活動）

▲少ない人数でのコミュニケーションスキルを学ぶことはできたが、授業の形態に近い大人数での環境で意見を言う力が身についていることは見とれなかった。より授業に生かせる力をつけていくことが課題である。

②　３学期の実践

３学期は、より授業の中で生かせる力をつけることをねらい、「発信力向上」を目的とした活動と、より話しやすい「学級雰囲気づくり」を目的とした活動を行った。

発信力向上トレーニング

第１回の発信力向上トレーニングでは､｢現時点での自分の発信力をメタ認知する」ことをめあてとして、全体の場でどのぐらい意見が言えるか、または言えないのかを確認した。生徒の振り返りからは、意見が言える理由として「みんなが反応してくれるから」「みんな聞いてくれる」「慣れている」といったものが多かった。意見が言いにくい理由として「シーンとなるのがいやだ」｢笑われたりするのがいやだ」などが多く、「言える理由」「言えない理由」ともに、クラスの雰囲気や聞き手の反応に起因するものが多いことがわかった。

発信力向上トレーニング
お題「もし 100 万円ゲットしたらどうするか」

第２回以降は、生徒の振り返りをもとに、スモールステップで少しずつ慣らしていくことを目的として活動を展開した。４人程度の少人数グループでの意見の伝え合いから、１０人程度の中人数グループでの意見の伝え合いに移行する活動や、クラスの人数を２分割した人数（１５～２０人程度）での意見の伝え合い活動を行った。また、挙手発言だけではなく、列指名発言や相互指名などを取り入れ、授業でも生かせるようさまざまな形態を経験できるようにした。その中で、聞き手の反応の仕方について指導することを意識し、発信力向上とともに聞き方の上達が図れるように心がけた。

学級雰囲気づくり活動

長期休業明けや月初めのタイミングで、人間関係づくりを目的としてさまざまなゲームを行った。｢冬休みに一番遠くへ出かけた人を探すゲーム」や「嘘つき自己紹介ゲーム」、「班で協力して模写を完成させる活動」などを行った。

【３学期の成果と課題】〇…成果、▲…課題

〇「自己紹介を聞いたり質問したりして、みんなと言葉のキャッチボールができた。みんなの新しい一面を知ることができた」という振り返りから、相手のことを知る、自分のことを知ってもらう経験ができ、意見を言いやすい温かな学級づくりへの一助となったことがわかる。(学級雰囲気づくり活動)

〇発信力向上トレーニングにおいて、意見が言いにくいのは「自分の意見に疑問をもたれるのがこわいから」「変なことを言ってシーンとなるのがいや」「みんなから注目されたくないから」といった振り返りが多く見られた。個人の問題よりも、集団の雰囲気に起因するものが多いことがわかる。そこから発信力を高めていくためのてだてを考えていくことにつながった。

▲友達の考えを聞きたい・自分の考えを言いたいと思えない題目だと、話す必然性を感じられず、発信意欲の低下につながることもある。「聞きたい・話したい」と思えるお題の精選が課題である。

▲自分の考えを全体の場で発信するのに抵抗感があることが、各活動の様子から見とれる。生徒の振り返りから、活発な意見交流をするには「伝える技術」「話の聞き方を含めた、言いやすい雰囲気」「慣れ」が必要であると考える。

▲「客観視・再構築」の力をつける活動を展開したかったが、時間の都合上難しい部分があった。

Ｒ６年度は、１学期に少人数での対話力向上トレーニング、２学期に中人数～大人数での発信力向上トレーニングを行い、３学期には火曜日・水曜日と２日続きで客観視・意見再構築トレーニングを実施し、研究の目指す子ども像に近づくような活動内容を再考していきたい。

⑷　生徒アンケートの実施

生徒の意識調査を目的として、７月と２月にアンケートを実施した。アンケート項目と結果は表１のとおりである。

表１　生徒アンケート結果

		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16
R5. 7 月	とてもあてはまる	52.5	41.6	41.3	37.0	50.2	37.4	41.0	59.0	42.6	59.7	55.4	30.8	36.4	36.4	35.4	17.4
	少しあてはまる	42.0	45.9	44.9	49.5	39.7	45.9	46.6	38.4	45.2	36.1	38.0	44.9	50.2	48.5	50.2	6[illegible].0
	あまりあてはまらない	3.9	11.1	10.5	9.5	8.5	13.1	9.8	1.6	8.9	2.6	5.9	19.7	11.5	13.1	11.8	1[illegible].7
	全くあてはまらない	1.6	1.3	3.3	3.9	1.6	3.6	2.6	1.0	3.3	1.6	0.7	4.6	2.0	2.0	2.6	[illegible].9
R6. 2 月	とてもあてはまる	46.7	42.1	**36.6**	41.8	46.0	34.3	41.4	60.9	46.0	63.3	55.8	36.7	36.2	40.8	33.5	32.5
	少しあてはまる	47.1	50.7	**51.4**	48.7	48.2	47.7	46.8	35.5	45.7	33.5	37.1	40.3	47.5	49.1	52.0	45.5
	あまりあてはまらない	5.1	**6.5**	11.2	8.0	**4.7**	15.2	10.4	**3.3**	7.6	3.2	6.8	16.5	**13.4**	**7.9**	12.7	19.9
	全くあてはまらない	1.1	0.7	**0.7**	**1.5**	1.1	2.9	1.4	0.4	**0.7**	**0.0**	0.4	6.5	2.9	2.2	1.8	2.2

Q1	中学校の授業を楽しく受けている（全般）
Q2	中学校の授業で，自分で考えたり，調べたりすることで，自分の考えをもつことができている（自己理解・自己決定）
Q3	発言や発表の場面では，自分の考えや意見をもてている（自己決定）
Q4	発言や発表をするとき，自分の考えや意見が相手に伝わるように意識している（かかわり）
Q5	中学校の授業で，仲間と考えや意見を交流することで，自分の考えを深めることができている（かかわり・自己理解・自己決定）
Q6	授業の振り返りができている（授業でできたこと，できなかたことがわかる。また，次への課題の意識がもてている）（自己理解）
Q7	自分が発言や意見を言うとき，仲間はしっかりと聴いていると感じる（かかわり）
Q8	仲間の発言や発表を理解しようと聴いている（かかわり）
Q9	仲間の発言や発表を聴いて，自分の考えに生かすことができている（自己決定）
Q10	授業で「できた」「わかった」と思うことがある（自己理解）
Q11	学習において，自分の得意なところ，不得意なところがどこかわかっている（自己理解）
Q12	家庭学習において，自分に必要な学習を考えて取り組んでいる（自己決定）
Q13	中学校の授業で学習したことは，社会に出たときに役に立つと思う（ひろげる）
Q14	ある教科の授業で学習したことが，他の教科の授業で役に立つと感じることがある
Q15	中学校の授業で学習したことは。普段の生活で活用できたり，生かしたりできると思う
Q16	中学校の学びをとおして，自律人として，社会の中で，よりよく生きていく自信がついてきた

【アンケート分析による成果と課題】〇…成果、▲…課題

〇　どの項目においても、「とてもあてはまる・少しあてはまる」という、学習や自己理解、自己決定、かかわり合いに対して前向きな捉えの生徒が多いことがわかる。

〇　表１「Ｑ３発言や発表の場面では、自分の考えや意見をもてている」「Ｑ４発言や発表をするとき、自分の考えや意見が相手に伝わるように意識している」の項目で、「全くあてはまらない」を選択した生徒が減少している。（Ｑ３：７月 3.3%→２月 0.7%、Ｑ４：3.9%→1.5%）かかわり合いの場を設定した授業や、コミュニケーションスキルタイムの実施によって、仲間とのかかわり合いが増え、相手を意識した対話力が向上したと考えられる。

▲　「Ｑ12 家庭学習において、自分に必要な学習を考えて取り組んでいる」という項目において、生徒アンケートでは「あまりあてはまらない・全くあてはまらない」を合わせて 13%であるが、教師アンケートでは 42.8%と約半数が家庭学習について必要な自己決定ができていると捉えていない。この差は、学習ログなどで、自分に必要な学びを把握できるようなてだてを講じたが、有効であったかの検証が不十分であったことによるものと考える。家庭での学習状況をどれだけ把握すべきかは、一考の余地があり、検討する必要がある。

▲　どの項目においても、７～９割が「とてもあてはまる・少しあてはまる」と前向きな回答である。生徒のこの捉えを、生徒自身が自分自身を客観視できているかどうかは、再考する必要がある。アンケート項目についても検討し、改善していく。